

## ワークショップ「北東アジアの非核化と世界の非核化」を開催

梅林 宏道

RECNAは、2012年の設立以来取り組んできた研究プロジェクト「北東アジア非核兵器地帯への包括的アプローチ」の締めくくりとなる3回目のワークショップを9月14-16日に東京で開催した。それは、国連総会で決まった9月26日の第1回核兵器廃絶国際デーを記念する行事でもあった。会場はグランドプリンスホテル新高輪と明治学院大学・白金キャンパスの2か所で行われた。

3回のワークショップの一貫したテーマは、北東アジア非核兵器地帯の設立という目標を、密接に関係するいくつかの懸案を同時解決する「北東アジアにおける包括的平和安全保障協定」の一要素と位置付けるモートン・ハルペリン(米オープン・ソサイエティ財団、元大統領特別補佐官)の提案を諸側面から検討することであった。そのうえで、今回のワークショップは次のような目標を掲げて行われた。

―被爆70周年、2015年NPT再検討会議を前に、北東アジア非核化とグローバルな核軍縮との関連について考察する。

―日本の政策立案に直接、間接に関係する識者、研究者と課題や問題意識を共有する。

―日本と韓国の研究者や政策関係者と課題や問題意識を交流し、今後の共同の取り組みを進展させる。

―国連軍縮諮問委員会が北東アジア非核兵器地帯の設立に向けて国連が貢献するよう事務総長に勧告したことを受けて、国連との研究協力を進展させる。

このような目標の下に、ワークショップの形や内容について次のような取り組みを行った。

―1995年NPT再検討・延長会議の議長であった元国連事務次長ジャヤンタ・ダナバラ博士を基調講演者に迎えた。

―北東アジア非核兵器地帯への包括的アプローチの共同研究に取り組んできたハルペリン、ピーター・ヘイズ、李起豪、J・エンクサイハンなどコア・メンバーを継続して招待した。

―外務省の後援を得て日本の政策担当者・専門官をワークショップに招待するとともに、外務省においてハルペリンなど海外研究者との意見交換会を持った。また鈴木馨祐(自民)、山口那津男(公明)、岡田克也(民主)の各議員がテーマに関する発言を行った。

―韓国から8人の研究者をワークショップに招くとともに、日韓研究者コーカスを開催し、今後の日韓共同研究について協議した。また、核軍縮不拡散議員連盟(PNND)韓国支部から2人の国会議員を招くとともに、PNND日本支部が主催する議員フォーラムにおいて日韓の議員の意見交換の機会をもった。

―国連広報センターの後援を得るとともに、国連軍縮局大量破壊兵器部門から上級専門官バレール・マンテルスの参加を得た。

以下では、当日の議論における注目すべきいくつかを紹介する。



第3回国際ワークショップ参加者 明治学院大学白金キャンパス  
2014年9月15日 撮影:RECNA

ハルペリンの発表は、北東アジア非核兵器地帯について現時点で日本政府が行動を起こすことの必要性和利点について強調した。その背景には東京での開催という側面もあるであろうが、彼自身が指摘しているように米政府に動きを作ることが困難であるという、ワシントンにおける現状認識があった。とはいえ、北朝鮮の非核化は北東アジア地域の安定にとってもグローバルな不拡散体制にとっても極めて重要であるという彼の確信は変わらない。とすれば、いずれかの関係国政府が行動を起こさなければならず、彼の分析によれば、今は「日本がそれだ」ということであった。

ダナバラは非核兵器地帯の意義について見解を述べ、彼の見識の深さと経験の大きさを思わせた。非核兵器地帯が拡大してゆくことによって核兵器を配備できる場所は狭くなってきており、核兵器国の戦略構想に制約を課していると彼はその効果を指摘した。また、非核兵器地帯は地域紛争の除去や全面的完全軍縮をもたらしている訳ではないと述べつつ、非核兵器地帯は平和が拡散する基礎を築き、人類が核なき世界に生きる権利を確立してきた、と述べた。

非核兵器地帯と拡大核抑止あるいは「核の傘」に関する議論が繰り返されられたのは、会議の特色の一つであった。日本と韓国が中心となる北東アジア非核兵器地帯がテーマであることから当然であるが、この問題が非核兵器地帯についての新しい理論的前線にあることの表れでもある。ダナバラは「拡大核抑止と非核兵器地帯は両立しない」と述べ、マンテルスは「加盟国が拡大核抑止力に依存し続けるような地帯を形成することは生産的ではない」と述べた。国連関係者の議論の積み重ねが、このような方向にあることが印象付けられた。これは、ハルペリンが日本や韓国の政策関係者を説得するために用いる議論と一見整合していない。しかし、正確に吟味するとそうではないと考えられ、RECNAが貢献すべき論理構築の一つの重要な課題となるだろう。

(うめばやし ひろみち、RECNAセンター長)

2014年9月18日(木)、今年が初めての国連核兵器廃絶国際デー(9月26日)を記念し、元国連事務次長で現在パグウォッシュ会議会長のジャヤンタ・ダナバラ氏を招いて、記念講演会を開催した。テーマは「北東アジアの非核化と世界の非核化」であった。1995年の核不拡散条約(NPT)再検討会議にて、NPTの無期限延長を決定した時の議長であられたダナバラ氏の核軍縮・不拡散への思いが会場全体に伝わって、熱気あふれる有意義な講演会となった。会場には、被爆者の皆様はもちろん、高校生に至るまで、立見席が出るほどの参加者数で、会場からも思いのこもった質問やコメントが相次いだ。

ダナバラ氏の講演は、世界の核兵器・核軍縮の現状から始まり、核不拡散条約をはじめとする国際的な枠組みについての解説、そしてなぜ核軍縮が思う通りに進まないのか、進ませるためには何をすべきかについて、わかりやすく、また丁寧な説明があった。しかし、ハイライトは、講演の最後に紹介した「非核兵器地帯構想」についての説明であった。なかでも、ダナバラ氏も参加したRECNA主催のワークショップでの議論も踏まえ、「日本がリーダーシップをとって、北東アジアの非核兵器地帯構想を推進すべきだ。核抑止に依存しない安全保障の枠組みを日本自らが先頭に立って進めるべきである。被爆国日本の責務でもあり、被爆者の声を世界に届けるべきだ」と熱く語られ、満場の拍手で講演を終えられた。

その後、梅林RECNAセンター長との対談に移り、NPT体制の重要性や来年のNPT再検討会議に向けての課題、非人道性を巡る議論と核兵器違法化についてなど、時々個人的な体験やお人柄がうかがえるやり取りがあり、極めて高度な話題でありながら、会場は穏やかな雰囲気の中で意見交換が続いた。

最後に、フロアからの質問をうけたが、熱心な高校生や市民からの質問に対し、一つ一つ丁寧に答えられたダナバラ氏に、参加者はみな強い感銘を受けたようであった。



ダナバラ元軍縮担当国連事務次長  
国立長崎原爆死没者追悼祈念館ラウンジ  
2014年9月18日 撮影:RECNA

講演会の司会を務めさせていただいたが、この難しいテーマで、これほど市民と講演者が一体となった講演会に参加した記憶がない。会場には「核のない世界を」「長崎を最後の被爆地に」という思いと、ダナバラ氏の温厚で親しみやすいお人柄による柔らかな雰囲気満たされ、最後まで別れを惜しむ声で一杯だった。

みなさん、ご心配ありません。ダナバラ氏は来年11月、パグウォッシュ会議会長として、長崎に再度ご訪問されます。またその時に会いましょう。

(すずき たつじろう、RECNA副センター長)

## 長崎平和宣言文

## 問われる日本の立場

広瀬 訓

今年の8月9日に発表された長崎平和宣言文は、最近の国内外の情勢を踏まえて、昨年同様、具体的な内容を盛り込んだものとなった。まず核兵器の非人道性については、ナヤリット会議の成果(ニューズレターVol.2No.4参照)を受け、核爆発による被害が、経済や環境、気候など多方面に及ぶことを指摘し、あらためてその危険性を訴えた。

そのうえで、核兵器保有国だけでなく、日本のように核兵器保有国と同盟関係にあり、いわゆる「核の傘」の下での安全保障政策を取っている国々に対し、積極的な呼びかけを行っている点が注目される。当然これは日米安全保障体制の下で、アメリカの核抑止力に依存する政策を堅持しようとしている日本政府の方針を念頭に置いての言及であることは明らかであるが、それだけにとどまらず、現在国際社会において高まっている、核の傘の下に居る非核兵器国が、核兵器廃絶へ向けてのどのような役割を果たすべきなのかという議論を反映したものであるだろう。従来国際社会においては、核抑止力を肯定する核兵器保有国と、核軍縮の促進を強く訴える非同盟諸国を中心とする国々との間での意見の対立の影で、核兵器国と同盟関係にある国々は、核兵器国の後ろに従うという形であり存在感示すことは無かった。しかし、「核の傘」の下にいる国々が、核軍縮においてどのような役割を果たせるのか、また、果たすべきなのかをあらた

めて検討すべきという意見が国際的に広がっていることは、唯一の戦争被爆国でありながら、「核の傘」の下に居る日本にとって、極めて重要な問いかけである。それに対し、日本を取り巻く現実の脅威に対し、アメリカの核兵器に依存し、抑止する以外に選択肢は無いとする、いわゆる「現実論」を繰り返すだけでは、あまりにも柔軟性と想像力が欠けていると言わざるを得ない。それでは、「核の傘」の下にいる国々は、黙って現状に甘んじる他はないと言っているに等しい。そのような主体性も将来の展望も感じさせないような国が国際社会で存在感を示すことなど到底望めない。国際社会で名誉ある地位を占めたいと思うなら、明確で他国の共感を得られるようなビジョンを示したうえで、その実現へ向けての言葉だけではなく、たゆまない努力を重ねる姿勢を見せることが必要である。残念なことに、現在の日本は、口では「唯一の被爆国」として「平和」を唱えながら、核兵器廃絶をめぐる議論では、「核の傘」の下で、現実論を盾に長らく及び腰である。そのような日本の姿勢に対して、被爆地長崎からのいらだちをも含めた叱咤激励の声がこの宣言文だと言える。

来年には被爆70周年を迎え、被ばく者の方々の生の声を聴く機会は今後ますます減るばかりである。そして被ばくはおろか、戦争体験の無い世代の親に育てられた人たちがこれからの核兵器廃絶を担ってゆくわけで、その世代に対する期待もこの宣言には盛り込まれ

ている。そして、「被ばく」という体験そのものを若い世代に引き継ぐことは極めて困難である。だからこそ、「核兵器廃絶」という揺るぎないビジョンこそが、世代や国籍を超えて人々を結びつける絆として確立されなければならない。本当の「現実論」とは、「仕方がない」という言葉で現状を無批判に肯定することではない。「現実」をしっかりと見据えたうえで、現状からスタートし、理想へ向けて状況を改善しようとする

ることこそが本当の意味での「現実論」である。今年の長崎平和宣言こそが、日本の新しい「現実論」の先駆けとなることを期待したい。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

## RECNAサポーター

## 若者の取り組み

中村 桂子

2012年のRECNA設立後まもなく、核問題に関心があり、RECNAの活動に関心を持ってくれる人々を対象に、「RECNAサポーター」という制度を立ち上げた。当初はその名の通りRECNAを支援するボランティア活動が主軸であったが、現在は大学生を中心に、核・平和問題をテーマにした勉強会やイベントなどさまざまな自主活動を行うサークル的要素が強くなっている。とりわけ昨年「ナガサキ・ユース代表団」が始動してからは、同メンバーが活動を通じて得た知識や情報、国内外の若者らとのネットワークを生かす形で取り組みの幅が広がってきた。組織のリーダーは作らず、やりたいことがある人が企画立案をし、Facebook上で一緒にやっていく人々を募る。こうした「この指とまれ」方式で、現在、80人近くのサポーターがゆるやかに繋がり、情報交換を行っている。

「長崎の若者として2015年に何ができるか」——2013年冬以降、サポーターの間では熱い議論が繰り返されてきた。被爆70年夏に向けての2か年計画の主体として、学生実行委員会「Peace Bridge to 2015」が立ち上げられ、2014年8月10日には、イベント「Peace Bridge to 2015 ～核兵器の今に迫る～」が行われた。同イベントの中心は核軍縮をめぐる外交交渉を模したいわゆる「模擬国連」である。明治学院大学(横浜)など他大学の学生らの協力も得ながら準備が進められた。イベント当日には、同様の外交交渉シミュレーションを国連の場で継続的に実施している独ダルムシュタット工科大学の学生も招待された。ドイツの大学との連携もユース代表団の活動を通じて得られたものである。

以下は、中心メンバーの一人である中原ゆかりの報告である。

(なかむら けいこ、RECNA准教授)

\*\*\*\*\*

### 2015年に向けて

中原ゆかり

来年2015年は被爆70周年という長崎にとっては大変意義深い年です。その70周年に私たち学生も何か関わりたい、と思い今年2014年の8月10日にRECNAサポーターズで来年に向けた準備も兼ねてイベントを行いました。自分たちの知識を深めよう、世界の核兵器に関する実情を知ろう、ということで主な関係国8か国の大使になりきって「核兵器禁止について」条約交渉をしました。それから来年に活かせるつながりをつくらう、ということでイベント当日には東京やドイツ、ピースポートで活動している学生さんたちも呼んで、講演をしてもらったり交渉に参加してもらったりしました。

準備はとても大変で、たくさん失敗したり、いろいろな人に迷惑をかけたりましたが、その分来年につながるいいイベントとなったと思います。

まず、条約交渉の準備として手探りながらもいろいろな資料にあつ



学生イベント参加者 長崎大学キャンパス 2014年8月10日 撮影:RECNA

て勉強をしました。(私が担当した)インドという国は核兵器をどうして保有するに至ったのか、どういう理屈で今も持ち続けているのか。逆に、オーストリアやインドネシアのように核兵器廃絶を訴える国々はどのようなアプローチでそれを実現しようとしているのか。講演を聞くのではなく、先生の授業でもなく、自分で資料を探して本を読んで、たまには英語で出ている公式文章を読み漁って、と普段は気の向かない地道な作業をしました。もちろん時間はかかるし大変でしたが、はまると意外におもしろく、いい勉強したなと今ではちょっと自慢です。

当日の条約交渉もかなりエキサイティングでした。ぼつちり調べて臨んだつもりでも、いざ他国役の大使と交渉を始めるのとよくわからなくなったり、逆に話をしているうちにピンと閃くものがあったり。そうこうしているうちに話がまとまってきたり。顔が火照るくらい頭を使いました。

また、同じような問題に取り組んでいる同世代の人たちとお話できたことは私たちにとって大きな刺激となったと思います。「RECNAサロン」を始めたのもこのイベントがきっかけです。イベント当日の講演で明治学院大学の平和活動サークル「PEACE☆RING」さんの「PRIME de CAFÉ」という取り組みを聞きました。お昼休みの時間をうまく活用して、身の回りのことや社会のことについてお昼ご飯を食べながらお話をするそうです。私も同世代の友達とそういったことを話題にできる場があるといいなと思っていました。そしてその場がRECNAでの活動に興味を持つきっかけになった！という人がいれば一石二鳥だと思い「RECNAサロン」を始めました。初回のテーマは「地域に密着した再生可能エネルギー」でした。

来年被爆70周年に向けて私たちは今年8月10日にイベントという形で1年以上前から準備を始めたこととなります。あと約9か月。今年得た知識やつながり、それからたくさんの反省をどう活かすか。学生としてどんなことができるのか。少しずつではありますが来年に向けて話し合い再スタートです。来年に向けて夢は膨らみます。被爆70周年がヒロシマ・ナガサキの被爆地にとって、日本にとって、それから世界にとって記念すべき年となるよう、私たちもその大きなエネルギーの一つとなれるよう、祈るとともにがしがし行動していきたいです！

(なかはら ゆかり、長崎大学環境科学部2年)

# RECNAの活動

2014年7月1日～2014年9月30日

- 7月9日(水) ■大村市立大村中学校平和学習講師  
(広瀬副センター長)
- 7月12日(土) ■岐阜大学で講演会 (中村准教授)
- 7月14日(月) ■長崎大学附属中学校で講義 (中村准教授)
- 7月15日(火) ■長崎県立豊玉高校平和学習講師 (広瀬副センター長)  
～7月16日(水)
- 7月19日(土) ■平和案内人研修会講師 (鈴木副センター長)
- 平成26年度核兵器廃絶市民講座  
第3回「継承をめぐる記憶と語り」  
講師:高山 真(RECNA客員研究員)
- 8月1日(金) ■核弾頭ポスター完成記者会見  
(調理事、冨塚准教授、中村准教授)
- 8月2日(土) ■国際シンポジウム  
「信頼醸成から核廃絶へ～2015NPT再検討会議に向けて」  
を広島市立大学広島平和研究所及び中国新聞社と共催  
(鈴木副センター長が講師として参加)
- 8月4日(月) ■オーストラリアのクメント軍縮担当大使と意見交換  
(場所:外務省 広瀬副センター長)
- 8月7日(木) ■民主党核軍縮議連がRECNAを訪問
- 8月8日(金) ■精道三川台中高等学校平和学習講師  
(広瀬副センター長)
- 長崎大学にて立命館大学生とアメリカン大学生に講義  
(中村准教授)
- 8月9日(土) ■私立精道中学校平和学習講師 (中村准教授)  
■アメリカン大学とレクササポーターとの意見交換会  
■「輪の和」チャリティーコンサート
- 8月10日(日) ■学生実行委員会イベント  
「Peace Bridge to 2015～核兵器の今に迫る」
- 9月14日(日) ■第3回北東アジア非核兵器地帯国際ワークショップ開催  
～9月16日(火)
- セッション1「グローバルな非核化と北東アジア」  
(グランドプリンスホテル新高輪)
- セッション2「北東アジアにおける包括的平和安全保障協定」  
(明治学院大学白金キャンパス)
- セッション3「背景にある北東アジアの安全保障環境」(同上)
- セッション4「包括的協定の具体的検討」(同上)
- セッション5「北東アジア非核化へのさまざまな担い手」(同上)
- 日韓研究者コーカス(グランドプリンスホテル高輪)  
PNND日本・議員フォーラム(衆議院第一議員会館)  
NGOフォーラム(明治学院大学白金キャンパス)
- 9月17日(水) ■ダナバラ元軍縮担当国連事務次長とナガサキ・ユース交流会
- 9月18日(木) ■第1回国連核兵器廃絶国際デー記念講演会  
タイトル:北東アジアの非核化と世界の非核化  
講師:ジャヤンタ・ダナバラ(元国連事務次長)  
パネル対談:ジャヤンタ・ダナバラ、  
梅林宏道(RECNAセンター長)

- 9月24日(水) ■アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラムセミナー講師  
(鈴木副センター長、中村准教授)
- 9月25日(木) ■第19回RECNA研究会  
テーマ:「原始爆弾の原理と破壊力」  
-長崎原爆被害を事例にして-  
講師:岡林隆敏(長崎大学名誉教授)
- 9月30日(火) ■国連軍縮フェローシップ長崎研修講師  
(鈴木副センター長、中村准教授)

## お知らせ

- 2014年12月20日(土) 平成26年度 第5回核兵器廃絶市民講座  
「原爆の絵に見る被爆の記憶」  
-講師:四條 知恵(RECNA客員研究員)  
-場所:国立長崎原爆死没者追悼記念館  
交流ラウンジ  
-時間:13:30～15:30  
事前申込不要/受講料無料
- 2015年1月24日(土) 平成26年度 第6回核兵器廃絶市民講座  
「2015年NPT再検討会議に向けて」  
-講師:広瀬 訓(RECNA副センター長)  
-場所:国立長崎原爆死没者追悼記念館  
交流ラウンジ  
-時間:13:30～15:30  
事前申込不要/受講料無料

### 日程変更のお知らせ

第7回核兵器廃絶市民講座「被爆者の健康を考える」  
講師:三根 真理子  
日時:2015年3月21日(土) 13:30～15:30  
↓  
日時:2015年3月7日(土) 13:30～15:30  
に変更となります。ご注意ください。

## RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

第3巻2号 2014年9月30日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター  
〒852-8521 長崎市文教町1-14  
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165  
E-mail. recna@ml.nagasaki-u.ac.jp  
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 株式会社インテックス

©2014 長崎大学核兵器廃絶研究センター